ドクトル・キャット

双葉あんり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ドクトル・キャット

【Ｎコード】
Ｎ５４００Ａ

【作者名】
双葉あんり

【あらすじ】
綺麗な歌声が聞こえた。クラブ棟２階、３つ目の扉を開くと、そこには。猫とストリートミュージシャンが入り浸る、とある異色な部活の物語。

プロローグ

僕は君のためだけに歌を届けよう
君のためだけに歌おう
僕のすべてを君に捧ぐから

たとえば君が寂しいときは
僕は君のために優しい歌を歌おう
たとえば君が僕の名を呼ぶときは
僕は君を一番に優先しよう
たとえば君が記憶を亡くしたときは
心を亡くしてしまったときは
僕だけは君を想っていよう

哀しかったら呼べば良い　僕の名を
痛かったら泣き叫べば良い　僕が肩を貸すから
辛かったら僕のところにおいで
切なかったら僕と一緒に鼻歌を歌おうよ

ヤなこと全部吹き飛ばして
明日のチカラにしてしまえば良い
そうして僕らは強くなれるから

僕は君のためだけに歌を届けよう
君のためだけに歌おう
僕のすべてを君に捧ぐから

ヤなこと全部吹き飛ばして
明日のチカラにしてしまえば良い

そうして僕らは強くなれるから
僕は君のためだけに歌を紡ごう
君のためだけに歌うよ
僕のすべてを君に捧ぎたい

「良い歌ですね」
沢山の拍手を浴びながら、少年は声のした方向を振り向く。さっきまで曲をずっと聞き入っていた少女はしゃがみこんで晴れ晴れとした表情で少年を見た。
「ありがとうございます。嬉しいな。」
「私、この歌好きです」
少年が顔を綻ばせると、少女も釣られて微笑む。夕方の空の下影が伸びてゆく。ぱらぱらと街灯がつき始めた。少女以外に曲に聞き入っていた客たちも疎らになってゆく。
「優しくて、明るくて、…でもどこか切なくて。心に染みる良い曲ですね」
「気に入っていただけたなら光栄です。…思い入れがあるので」
「そうなんですか…素敵ですね」
からん、と石の転がる音が聞こえたので二人はほぼ同時にその方向を見やった。少年の後ろでにゃお、と鳴きながら猫が毛繕いをしていた。少女は「可愛い猫ですね」と手を伸ばす。猫は逃げることなくふわりと撫でられる。
「飼い猫ですか？」
「あぁ、いや…僕の猫じゃないんですけど」

「でも、すごく懐いてますよ？」
そう言われて少年が視線を戻すと、猫は少年に擦り寄り、ごろごろと喉を鳴らしていた。
「よく知らないうちに猫が寄ってくるんですよね…。凄いときは５０匹くらいに同時に囲まれたこともあるんですよ」
「えぇ、本当ですか？」
「本当ですよ」
言いながら、少年は自分に懐いている猫の頭を撫でてやった。猫は嬉しそうに鳴く。
「きっと、おにーさん猫の仲間だと思われてるんですよ」
「そうですかねぇ？」
「それか、猫が寄り付くようなフェロモンを知らないうちに振りまいちゃってるとか」
「だったら、すごいですねぇ」
「えぇ、すごいですね」
猫は安心しきった表情で少年のひざの上に乗っかり、すやすやと寝息さえ立てていた。少女が嬉しそうに「猫ちゃん」と呼んだ。
少年は楽しげにギターとピックをケースに仕舞いこみ、横にそっと置くと、猫を起こさぬよう静かな声だけで自曲を口ずさんだ。少女はそれに気づくと、幸せそうに目を閉じて曲に聞き入った。

僕は君のためだけに歌を届けよう
君のためだけに歌おう
僕のすべてを君に捧ぐから
ヤなこと全部吹き飛ばして

明日のチカラにしてしまえば良い
そうして僕らは強くなれるから

僕は君のためだけに歌を紡ごう
君のためだけに歌うよ
僕のすべてを君に捧ぎたい

第一話　猫の少年（前編）

あたしには、何かが足りないんだ。

いつもどおりの時間に起きて、いつもどおりの量の朝食を食べて、いつもどおりの電車に乗って、いつもどおりの駅で降りて、いつもどおりの時間に学校に着く。いつもどおりの足取りで教室に入り、いつもどおり友達に「おはよう」といって、いつもどおりのチャイムを聞いて、いつもどおりの退屈な授業を受ける。

”いつも”と同じ日常。何ら変わりない、何の変哲もない、日々。ただ違うのは、隣にキミが居ない。寂しいとは思わない。哀しいとも思わない。ただそこにある、妙な空虚感。

『別れよう』

いつもどおりだと思ってたんだ。キミも、あたしも。でも、キミは違った。息苦しかったんだ、と吐き捨てるように言って、去ってしまった。あの綺麗な金髪がキミの背中で綺麗に揺れていた。綺麗な金の目があたしを捉えても、それは冷たかった。あたしはその背中を追わなかった。苦しくはなかった。哀しくもなかった。泣いたりもしなかった。何故だろう、あんなに好きだったはずなのに。あたしは素直に別れを受け入れた。友達に戻ろうとも思わなかった。だって普通に無理じゃないか、別れたらもう元になんて戻れない。嫌いになったわけでもないのに。不思議。

あたしには、きっと何かが欠けている。

「ねぇ、朝日。次音楽だよ、移動しなきゃ。」

香枝が音楽の教科書と楽譜を持ってあたしの席までやってきた。早く早く、と急かす。あたしはロッカーから教科書と楽譜を取り出した。香枝はそれを確認すると、じゃぁ行こう、と腕を引いた。

音楽室は二階にある。階段を上って、向かって右に曲がって、ちょっと歩いてすぐの扉。あたしたちは階段を急ぎ足で上ってゆき、

左に曲がりそうになった。あれ、と思う。入学してもう半年も経つのに、道を覚えてないということはないはずだ。
「……なんか聞こえる」
あたしはそのまま左の道へ向かう。香枝が「待ってよ、授業遅れちゃう」などと焦っているが、あたしは気にしていなかった。歌が、聞こえる。

哀しかったら呼べば良い　僕の名を

「声と、ギター？」
「…軽音部って体育館じゃなかったっけ？」
と、香枝が後ろで首を傾げていた。そもそももう授業が始まる時間なのに、いいのか、この歌を歌っている人は。あたしはそのまま歩を進めた。クラブ棟二階、…三つ目の、扉…。
哀しくて切なくて、でも明るくて。寂しくて甘くて、でも甘すぎなくて、よく伸びる、きれいな声。あたしはきっとこの声に惚れてしまった。どうしてこの声は、こんなにあたしを惹きつけるんだろう。

切なかったら僕と一緒に鼻歌を歌おうよ

「…ここだ」
息を呑む。ドアに手をかけた。ゆっくりと、ノブを回す。がちゃり、と、扉は簡単に開いた。きっともう始業のチャイムは鳴ってしまったんだろう、だけどあたしは気がつかなかった。香枝が真剣な面持ちでドアの先を見ている。あたしもそちらを見やった。
ドアを少し開けただけで、ぼんやりとしか聞こえなかった声が、大きく聞こえた。自然に流れてくる声。ギターの音色。

僕は君のためだけに歌を届けよう

君のためだけに歌おう
僕のすべてを君に捧ぐから

声の主は、あたしたちに気がついている様子はなかった。ずっと、手も口も止めることなく、歌い続ける。一生懸命で直向で真っ直ぐで。
明るい栗色の光る髪。少し伏せたレモンの瞳。金よりも純粋な色。濁りのない。

ヤなこと全部吹き飛ばして
明日のチカラにしてしまえば良い
そうして僕らは強くなれるから

僕は君のためだけに歌を紡ごう
君のためだけに歌うよ
僕のすべてを君に捧ぎたい

…ギターの音色が止まった。これで終わりのようだ。レモンの瞳の少年は、ようやくあたしたちに気がついたようで、目が合ってしまった。なんとなく、気まずい…気がする。
「あ、あの…」
あたしたち別に、と続けようとして声が出なかった。その先が思い浮かばなかったからだ。こういうときは何て言い訳すればいいんだ？　香枝も後ろで固まっているようだった。
「…君達どうしたの？」
何を言うか迷っていたら、少年の方から声を掛けてきた。歌っているときとは違う、落ち着いた声だった。この人、顔、よく見たら綺麗だ。女顔とはこういう顔のことを言うんだろう。どちらかといえば可愛い部類に入る整った顔立ちだ。
「……歌、が…聞こえたんだ…」

しどろもどろになりながら答えると、香枝も後ろから「そ、そう！　そうなの！」と合わせた。
「…やだな、聞こえてたんだ。やっぱ防音じゃないと駄目だね。」
少年は独り言を言うようにぽつりと言った。
「ねぇ、君達はいいの？　授業。」
「「……あ」」
あたしと香枝の声がそろった。慌ててこの部屋にあった時計を見た。授業開始から五分ほど過ぎていた。
「やば…っ！　行こ、香枝！」
「う、うん」
あたしは香枝の手を引いて急ぎ足でその部屋を出、きちんと扉を閉め（少々乱暴になってしまったせいかバタンと大きな音がした）、まっすぐ音楽室へと向かった。
音楽室に入ると、当然授業は始まっていたようで、先生に変な目で見られたが、すみませんと言って席に座った。

※

「トーヤ？　今の誰だ？」
黒髪の少年が部屋の奥からやってきた。さっきの少女たちが扉を閉める時に大きな音を立てていたのに気がついたのだろう。
川上燈夜＞＞かわかみ・とうや＜＜はその声に気がつくと、そちらを振り向いた。
「さあ。わかんないけど」
「まーたお前のファンじゃないのか？」
「違うよ」

燈夜はギターに視線を落とすと、それをケースに仕舞い、壁に立てかけた。黒髪の少年…心理カウンセラー部部長、金井亮太は明るい笑顔を浮かべると、そうかそうか、と軽快に燈夜の肩をたたいた。

「でもきっと、さっきの子達、また来るぜ」

「そうかなぁ」

「そうだよ、俺の勘は外れねぇからな」

そう言って、亮太はにっこりと笑い、また奥の部屋に引っ込んだ。

独り残された燈夜は、溜息を一つ吐くと、ドアに貼ってある紙が歪んでいるのを見つけ、それを直しにと席を立った。

『心理カウンセラー部』

第一話　猫の少年（後編）

退屈な授業は眠ってしまえば一瞬のうちに終わる。
一番後ろの席と言うのはこういうとき便利だな、と思う。やる気なんて出ない。退屈なんだ。休み時間になるたび香枝が「起きようよぉ、朝日ー」と起こしにやってくる。実技以外のすべての授業を睡眠で乗り越えて、あっという間に放課後へのタイムスリップ。香枝があきれた顔でやってくる。
「もう、朝日ずっと寝てたー！」
「眠いんだ」
ある意味では嘘だ。ただ退屈だっただけ。今日の記憶だってほとんどない。ただ、残っているのは――
「……ねぇ、香枝。あの部屋、行かないか？」
「…へ？」
香枝は一瞬訳がわからなかったようで疑問符を頭上に浮かべていたが、すぐに思い出したらしく「あぁ！」と叫んだ。
「あの歌の人の部屋ね！？」
「そう。」
”あの歌の人の部屋”。言うまでもない、一時間目の音楽の授業の前に見かけた至極怪しいあの部屋だ。何部の部室なのかはよく見ていなかったからわからないけれど…行けば解るだろうと踏み、行くことにした。
荷物は置きっぱなしにしたまま、香枝とあたしは二階への階段を上り、左に曲がった。クラブ棟への通路を抜け…そこから、３番目の扉。
「…ここ、だったよね？」
「そうだな」
扉に貼ってある紙を見る。…『心理カウンセラー部』。妙に丁寧な文字でそう書いてあった。その下には何やら『受け付けは昼休み・

放課後です。休日は予約制。』などと書かれている。見るからに怪しい部活じゃないか。こんな部がこんな学校にあるだなんて知らなかった。恐る恐るノブを回した。がちゃり、と言う音が心臓に悪いように感じられる。

そこに、いたのは。

「いらっしゃい。来ると思ってたよ。林田朝日さん、杉村香枝さん。」

少年はにっこりと笑って見せた。朝見た訝しげな表情とは違う、屈託のない笑顔。怯むじゃないか。

「なんで、名前」

「学校のことについては部長が色々詳しいからね。さ、そんなとこにいないで座ってよ。歓迎するよ」

言って、少年は椅子を勧めた。朝は気づかなかったが、よく見たらアンティーク小物が並べられた、小洒落た喫茶店のような内装になっている。丸テーブルの支柱は一本のみ。椅子は洋風で華奢。なんでこんなに金がかかってるんだ。

とりあえず、何も言わず、座った。香枝も座ると訝しげに少年を見やっている。

「申し遅れました。僕は2年C組川上燈夜。よろしくね」

変わらず笑顔を絶やさない少年は、何だか人懐っこく感じられた。自分も自己紹介をしようかとも思ったがもうすでに川上さんは知っているようだったので、言う事に困った。どうすれば、いいんだろう。

困っていると、奥の方から何やら物音がしたのでそちらを見やる。奥の扉が乱暴にがちゃりと開き、そこから黒髪の背の高い男が姿を現した。男は、あたしたちと川上さんを交互に見ると、にやりと笑った。

「俺の予想が当たったな、トーヤ」

「大正解、だね」

何やらにやにやと笑っている。でも別に嫌な感じはしなかった。

不思議だ。
「あの…」
「かしこまらなくていいよ、林田さん。ここに用があるのは君のはずだよね？」
「……は？」
川上さんはにこりと笑う。顔が綺麗なだけにその笑顔だけでうろたえてしまう。純真無垢な人間は時に残酷だ。
「一週間前まで、寺門先輩と付き合ってたんだよね」
……何で、知ってるんだろう。特に大っぴらに付き合っていたわけではないのだけれど。あたしが不思議がっていると、川上さんが気がついたように「あぁ、」と言った。
「そこの金井亮太部長が寺門先輩と友達だったからさ」
「…そう、ですか」
心を見透かされているみたいだ。

「さて、この部の説明をしてなかったね」
川上さんがパンと手をたたいた。机の上で手を組み、じっとこちらを見た。川上さんの後ろの壁に寄りかかっているギターケースに気がついた。シンプルな黒のギターケース。あのギターはこの中に入っているのだろうか。
「この部は心理カウンセラー部と書いてるけど正しくはそんなに専門的じゃない。ただ普通に訪れてきた人の相談や愚痴を聞いたり、歌を歌ったり」
「歌うんですか」
今、ものすごくさらりと言ったけど、歌うって可笑しくないか。
「僕は路上でライブをしてるんだ。歌うことが好きだから。歌ってすごい力を持ってるんだよ、知ってた？」
「それと何の関係が有るんでしょうか」
「歌は人々を救うんだ」
また、笑いながら言う。純真な笑顔。本気なのかと疑いたくなる

が、本気で言っているのだろう。自身に誇りを持っている人間の目。
「音楽は無くても良い様で実は無くてはならないんだよね。そりゃ音楽にも好みはあるから好き好きはあるだろうけど」
川上さんは手を組みなおした。動作の一つ一つが綺麗だと思う。
「誇りを持ってる人間の音楽を聴いていて気分を害す人は居ないってね」
…返す言葉もございません。
川上さんは言う。僕は自分の歌に誇りを持ってるんだ。込められるだけの自分の中の思いを詰め込んで、歌う。歌を届けたい人が居るから。僕の歌を聴いてくれる人が居るから。それだけで僕のチカラになるんだ。聞いて何かを伝えたいというわけじゃないんだ。ただ聞いてくれるだけで良い。解ってくれるだけで良い。幸せは伝染するんだよ、それだけで僕が幸せならば、聞いてくれる人も幸せでしょう？
綺麗な、人だ。
「世界が平和になるような立派な歌なんて歌えない。傷だらけの歌ばかりだよ。だけど、それでも」
幸せになってくれるのならそれでいいんだ。川上さんがそう言った。
「林田さん、君はさ。肩肘を張りすぎて居たんだよ。もっと気楽に考えよう。歌でも歌って、さ」
そうして川上さんはギターケースを指差した。
「カウンセラーってお堅い偽善者のイメージが強いんだってね。でも僕らはそんなの吹き飛ばしてやる。本気の気持ちを嘘だと思うようならば歌を聴いてくれれば良い。僕らは音楽の力を信じてる」
にゃお、という声がした。かたん、という音がして、その音の方向を見ると、一匹の猫が入ってきていた。薄汚れた、灰色の毛の子猫。猫は川上さんに向かって走りより、軽やかにジャンプをして川上さんの方まで上った。
「いらっしゃい、また来たね」

「かわいいネコさん」
喜んだのは香枝だった。可愛い可愛いと良いながら川上さんの肩の上の猫に触ろうとしたが、猫は嫌がって威嚇した。川上さんが苦笑している。
「何よぅ、そんなに嫌がること無いじゃない」
「仕方ないぜ杉村さん、トーヤは猫寄せ付ける体質だから。普通のノラは人間に対して友好的じゃねーんだよな」
「なんでだろうねぇ」
川上さんはあははと笑う。とっても不思議な体質じゃないですか。笑い事じゃないですよ。
猫が川上さんに懐いているのは一目でわかった。もしかしたら、猫は川上さんを仲間だと思っているのかもしれない。もしくは、川上さんが猫にだけ効くフェロモンを振りまいているか、どちらかだ。
「さて、じゃぁ歌おうかな」
「歌うんですか」
「そうだよ」
川上さんは後ろにあるギターケースに手を伸ばし、ケースを開けた。中から綺麗な木目の入った栗色のギターが現れた。川上さんが弾くには少し大きい気もしたが、なんとなく似合う。やっぱり不思議な人だと、思う。
ぼーっと川上さんがギターの準備をしている動作を見ていたら、横から部長の金井さんが話しかけてきた。
「見てろよ、林田さん。猫も愛すトーヤの歌だ」
猫も愛す。猫も歌を聴くのか、と少し驚いた。川上さんは準備が終わったようで、ギターを構えたまま顔を上げると、「始まり始まり」とおどけた調子で言った。

旋律が、走る。
うまくは言い表せないけれど、空気をも揺るがす音、とでも言うのだろうか。空気に存在感がある。川上さんが歌う歌は朝聞いた歌

と同じもののようだった。

僕は君のためだけに歌を届けよう
君のためだけに歌おう
僕のすべてを君に捧ぐから

気がつけば開いたままの扉からぽつりぽつりと猫が入ってきていた。まるで川上さんの歌を聴きに来た客のように、川上さんを真ん中に円陣を組んで、静かに聞き入っている様子だった。
メロディラインは穏やかで、明るい音色のバラードだった。色で表すなら、オレンジと黄色の中間。

たとえば君が記憶を亡くしたときは
心を亡くしてしまったときは
僕だけは君を想っていよう

不思議だ。何故だか、人を安心させる力を持っている。悩みなんて、どうでもよくなるくらい清清しくて。優しくて。泣きたくなる。まだ、曲は始まったばかりだというのに。
声に聞き入りすぎてそれだけで、気持ちが満たされる。
目を閉じた。声だけに集中したかった。涙が溢れそうなのを防ぎたかったのも有る。なんてよく伸びる声。そんじょそこらのミュージシャンが何十年努力しても出せないような声を使う。人の心を動かす声。

辛かったら僕のところにおいで
切なかったら僕と一緒に鼻歌を歌おうよ

鮮やかな声。言葉の一つ一つが色味を帯びている。はじめは明るい色だと感じたのに、本当は違った。何故だろう、哀しみの色にだ

って染まっている。あぁ、あたしは。本当は哀しかったのかもしれない。本当は、見捨てられたんだと感じて。辛かったのかもしれない。存在価値を欲しかったのかもしれない。

ヤなこと全部吹き飛ばして
明日のチカラにしてしまえば良い
そうして僕らは強くなれるから

僕は君のためだけに歌を紡ごう
君のためだけに歌うよ
僕のすべてを君に捧ぎたい

少しの伴奏が続いて、歌は終わった。拍手は無かった。意味も無く涙が溢れてくる。不思議だ。香枝はただ呆然と立ち尽くしていたし、金井部長は腕を組み、誇らしげな表情を浮かべていた。猫たちは気がついたら眠っていた。心地よかったのだろうか。
涙を制服の袖で拭う。じわりと染みた。川上さんは笑っていた。
川上さんの歌には浄化作用があったのかもしれない。涙が次から次へを溢れ続けた。こんなに泣いたのは、久しぶりだった。

※

少女たちは、「ありがとうございました」と言うと、去っていった。静かにドアを閉めるときの林田朝日の表情は、妙にこざっぱりとしていた。暗い影を落としていた数分前が嘘のようだ。
「今日もお手柄だったな、トーヤ」
「それほどでも」

少年は笑った。想いを乗せて、歌うだけで、誰かが救われたとしたならそれが少年の幸せだった。ただ悔いていた、『あの頃』よりも、ずっと。

歌を届けたい人が居た。だけど、その人はもうこの世には居なかった。ならばせめて声だけでも届くようにと、ずっと路上で大声で歌っていた。あの人に、届くようにと。ただ直向に、想いを込めて歌っていた。聞こえてないかもしれないけれど。ただの、自己満足だったかもしれないけれど。

燈夜がギターを仕舞いながら視線はギターのまま、亮太に言った。

「そういえば、部長。寺門さんのこと。言わなくて良かったと思う？」

寺門。少女林田が、交際していた人物。謎多き、亮太の親友。

「…知らないほうがいいだろうな、失踪してるだなんて」

知ったって何も出来ないしな、といい足した。何も出来なかったのは俺たちの方だが、と暗に言っているようにも感じられた。

寺門は朝日と別れて数日後、突然失踪した。親友の亮太には一切何も告げず。理由なんてわからなかった。教えてもらえなかったからだ。気まぐれなやつだしいつか、帰ってくるかもな。亮太は言った。力ない声で。まるでそれは願いのように。

ふと、扉が開いた。二人は驚いてそちらを見た。立っていたのは、二人の少女。凛とした、表情で。

「林田さん、杉村さん。どうしたの？」

燈夜が不思議そうに、忘れ物？と聞いた。朝日はふるふると首を振った。そして、真剣な面持ちで二枚の紙を差し出した。

少年は、それを受け取り、よく見た。自分も、何度か見たことのあるプリント。

「入部届けです。あたしたち、この部に入りたいです」

少年二人は、一瞬ほうけていたが、やがて顔を見合わせると、にっと笑い、声を合わせて言った。

「「大歓迎」」

一匹だけ残っていた灰色の猫が、「にゃお」と短く鳴いた。

第一話　猫の少年（後編）　（後書き）

これで第一話は終了です。
ドクトル・キャットは私のサイトの方でもこそこそ公開しているのですが、大変思い入れのある作品です。トーヤのセリフは私の言葉でもありますから。…といっても、私にはトーヤみたいな音楽の才能なんてないんですけどね。
ここまでじゃ恋愛要素が薄い感じがしますが、回を増すごとにじわじわとラブい雰囲気になっていくので（笑）恋愛小説が読みたい方も見放さないで居て頂けると嬉しいです。
ではでは、ここまでお読み戴き有難う御座いました！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5400a/

ドクトル・キャット

2010年10月16日00時00分発行